

診療録の全面開示により庄内地域全体で 一貫した医療・介護提供を支援 既存ネットワークとの接続でさらなる地域連携が促進

山形県北西部の庄内二次保健医療圏で地域医療連携の成果を上げている「ちょうかいネット」。2011年4月に酒田地区で本格運用がスタートし、翌年6月には鶴岡市立荘内病院ならびに13年前から稼働している鶴岡地区医師会の地域電子カルテNet4Uとの相互接続により、庄内地域全体で一貫した連携医療を行う環境が整いました。調剤薬局や介護施設の参加も徐々に増えており、病病・病診連携から地域包括ケアを支援する医療情報ネットワークへと発展しています。

医療情報の共有により 地域全体で一つの病院に

庄内二次保健医療圏（人口約29万5000人）は、酒田地区、鶴岡地区から構成されています。人口10万人に対する医師数（169.2人）をはじめ、薬剤師、看護師とも山形県平均を下回っており、医療資源の不足が深刻化していました。医療資源の効果的・効率的な活用を図るため、2008年には酒田地区において県立日本海病院と市立酒田病院が統合・再編され、日本海総合病院・日本海総合病院酒田医療センターとして診療を行っています。また、鶴岡地区の地域中核病院である鶴岡市立荘内病院も医師不足・偏在化が顕著であり、庄内地域全体で一貫した連携医療が不可欠になっていました。



日本海総合病院 副院長
島貴 隆夫氏

酒田地区では、地域中核病院・診療所とのヒューマンネットワークは構築されていたものの、効率的な地域医療連携が活発だったとはいえない面もあったといいます。こうした背景の下、酒田地区で2011年4月に本格稼働したのが、

「ちょうかいネット」です。

「ITを活用して地域の医療情報を共有し、一貫した治療方針の下に切れ目ない医療を提供する体制を構築することを目的に協議会を発足、地域全体を一つの病院として眺められるような環境を目指しました。この際、最も大事だったことは診療録の全面開示です」と、日本海総合病院副院長 島貴隆夫氏は経緯を述べます。また、「ちょうかいネット」は当初から調剤薬局、訪問看護ステーション、介護施設等との情報共有を視野に入れ、段階的に拡大することを計画していました。

運用開始時は同病院と近隣の中核病院である本間病院が情報公開施設となり、公開2病院、閲覧9病院・37診療所でスタート。その後、歯科診療所、調剤薬局、訪問看護ステーションが参加し、現在（2013年1月末）では公開3病院・1医師会を含む90施設が参加し、登録患者は約6200人に上っています。

先行する地域電子カルテ Net4Uと接続

酒田地区で運用を開始した「ちょうかいネット」に2012年6月、鶴岡地区の医療機関が参加しました。荘内病院ならびに鶴岡地区医師会が2000年に構築・運用してきた地域電子カルテ（Net4U）が「ちょうかいネット」に接続、Net4Uに参加する診療所が情報公開できる環境が整備されました。「12年を経たNet4Uを全面的にリニューアルしたことを機に『ちょうかいネット』へ

接続する機能を実装し、医療圏全域をカバーする医療情報連携ネットワークに参加することになりました」（鶴岡地区医師会会長 三原一郎氏）と経緯を述べています。



鶴岡地区医師会 会長
三原 一郎氏

鶴岡地区の診療所は荘内病院との医療連携が主で、同病院もNet4Uに参加していました。しかし、電子カルテから自動で情報登録する機能がないなどの課題がありました。「酒田地区で運用を開始していた『ちょうかいネット』に荘内病院が参加し、ID-Linkと接続をしたことで、地域電子カルテNet4Uを利用する診療所が、同病院が公開する患者情報を閲覧できるようになったことが大きなメリットです」（三原氏）と「ちょうかいネット」接続によって地域医療連携の有用性が向上した点を指摘しています。

「診療所は、がんや脳卒中のかかりつけ患者さんなど荘内病院で定期的を実施する検査の結果を閲覧するために利用するほか、同病院に紹介した患者さんをフォローするために『ちょうかいネット』を活用しているようです」（三原氏）。

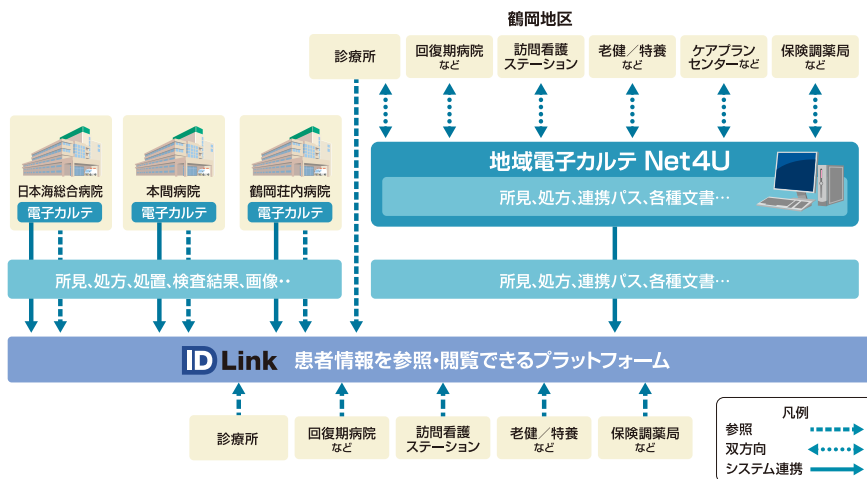
ちょうかいネットは かかりつけ医にとって “魔法の望遠鏡”

「紹介した患者さんが、地域中核病院でどのような治療を施されているのか、容体はどうなっているのか自院に居ながらにして見る事ができる——『ちょうかいネット』は、かかりつけ医にとって“魔法の望遠鏡”です。登録患者数500人弱を抱える酒田市のさとう内科クリニック院長 佐藤顕氏は、「ちょうかいネット」をこう例えています。同クリニックは紙カルテの運用でありながら「ちょうかいネット」をフル活用しており、在宅患者の全数登録をはじめ、自ら積極的に患者に情報連携の同意取付けを行っている。

“魔法の望遠鏡”というように佐藤氏が最もメリットを感じているのが、診療録の全面開示です。これにより、かかりつけ患者の入院先での状況把握ができます。「貧血のあるリュウマチの患者さんに臀部の潰瘍ができ、形成外科病院に紹介して手術してもらいました。『ちょうかいネット』で毎日状況チェックしているとヘモグロビン値が急激に下がったため、急遽FAXで輸血を依頼し、回復できたというケースもあります」(佐藤氏)と活用例を挙げます。

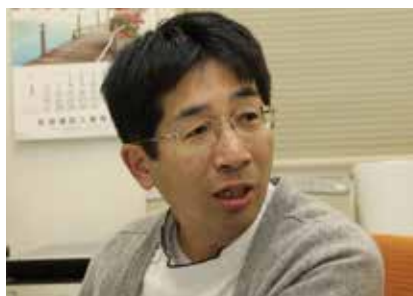
また、患者にとっては地域中核病院での検査結果をかかりつけ医で説明を受けられる点をメリットと感じています。患者さんは親しいかかりつけ医に検査結果を説明してもらえることで、安心感につながっているようです」(佐藤氏)といえます。

一方、「ちょうかいネット」の病病連携における成果として島貫氏は、解離性大動脈瘤などで緊急手術が必要な事例を挙げています。入院先病院から救急転送された患者がちょうかいネットに登録されていれば、連絡があった時点で画像データをチェックし、即座に手術体制を執ることができます。「昨年末から、夜間でも救命救急センターのクラークが救急対応登録すると搬送元病院のIDで患者情報を閲覧できるようにしました」(島貫氏)。また、緊急搬送・手術適用の



遠隔画像コンサルにも利用できる点もメリットと強調します。

「ちょうかいネット」が本格運用されて3年目を迎えますが、地域医療連携は着実に成果を上げています。その一端が日本海総合病院の紹介率・逆紹介率に表われています。島貫氏は「ちょうかいネット」が直接的な要因とは断言できないとしながらも、「運用開始1年で紹介率が9.8ポイント、逆紹介率が12.3ポイント増加し、医療連携が従来以上に促進されたと考えています」と述べています。



さとう内科クリニック 院長
佐藤 顕氏

一方、これまで登録患者数は順調に伸びていますが、医師によって利用件数にばらつきがあると指摘。「現在、あまり利用されていない医療機関においても、広く利用してもらえるような仕組みを検討する必要があります。また、現在は補助金を基に協議会を運営していますが、今後組織体制や運営資金をどうしていくか検討しなければなりません」と、島貫氏は課題を指摘しています。

「ちょうかいネット」を利用した地域連携パスの運用も昨年度から始まった脳卒中および五大がん連携パスに加

え、今年度からは心筋梗塞の連携パス運用が実施されます。「連携パスの運用は循環型医療連携の促進につながり、『ちょうかいネット』により地域完結型医療体制への移行が一層進みます。地域全体で一つの病院として機能するような体制を目指し、『ちょうかいネット』を育てていきたいと考えています」(島貫氏)と展望しています。

ID-Linkと既存の医療連携ネットワークとの統合を実現した「ちょうかいネット」。地域の既存資産をムダにすることなく、地域医療連携におけるさらなる活用と連携医療の活性化が促進されると期待されています。

13年の運用実績を誇る 地域電子カルテ「Net4U」

鶴岡地区医師会が運用する「Net4U」は、2000年度の通産省(当時)の補助金事業により構築されたASP型の地域電子カルテです。13年間にわたり運用され、現在病院、診療所、居宅介護支援事業所、調剤薬局など50施設以上が利用しています。

当初は病診連携の推進を主目的にしていましたが、訪問看護師にも利用開放していたことから、訪問看護時の患者さんの記録をアップするようになり、在宅主治医を中心とした多職種情報共有ツールとして活用されています。2012年5月の全面的リニューアルでは、医療と介護をつなぐヘルスケア・ソーシャル・ネットワークとしての要素を充実しました。

「ちょうかいネット」との相互連携によって、医療・介護連携における情報連携基盤として、さらなる活用がなされ新たな価値が生まれることが期待されています。